カントの歴史哲學（四）

米田庄太郎

七　「判斷力批判」の歴史哲學思想

さきに述べし處によりて察知される如く「判斷力批判」はカントの歴史哲學的思想の發達上、甚だ重要なる地位を占むるものにして、彼が「人類史の推量的始源」に於て「想像力の翼に乘りて」構成せる思想は、「判斷力批判」に於て始めて堅實に練り上げられて居り、又彼の歴史哲學の認識論的態度は本書に於て始めて明確に決定されて居るのである。彼は「人類史の推量的始源」に於て「想像力の翼に乘りて」始めて彼の歴史哲學を、夫れまでに圓熟せる彼の道德哲學に結び付けんと企だてたのであるが、併し歴史哲學と批判的目的論とを確實に結合せんとする彼の意識的努力は、吾人之を「判斷力批判」に於て、始めて發見するのである。

今「判斷力批判」に於けるカントの歴史哲學的思想を考究するに當て、吾人の先づ注意すべきは、本書に於て彼は人類は自然の目的であると云ふ思想を確立して居る事

である。此の思想は「人類史の推量的起源」に於て既に現はれ、又 Grundegung zur Metaphysik des Sitten に於て其の芽を發せるものであるが、「併し判斷力批判」に於て、始めて彼の歴史哲學の根本原理として確立されたのである。尙ほ此の思想に關聯して、茲に吾人はカントの哲學上、甚だ重要なる意義を有する一定の思想が發展されて居ることを發見する。夫れは自然の最後の目的 (Der letzte Zweck der Natur) と究極目的 (Der Endzweck) との區別である。

カントの考ふる處によれば、人類は「地上に於て悟性を有し、隨ふて自から任意的に目的を設定する能力を有する唯一の實在物である」が故に、其の運命から見て自然の最後の目的と考へられねばならぬ。併し夫れは只一定の條件の下に於てゞある。卽ち人類が自然其物から十分に獨立し、隨ふて究極目的であり得る處の一定の目的關係 (Zweckbeziehung) を、自然並に己れ自身に自から與へることを理解し、且つ其の意志を有つて居ると云ふ條件の下に於てのみ、自然の最後の目的であるのである。而して此の究極目的は自然秩序を越へて自由の世界を指示するものである。自然は本來究極目的を產出することは出來ない。自然に於ける究極目的を論ずるは合理的には無意味である。究極目的とは自然其物から十分に獨立し、而して只自由なる實

在物によりてのみ創造され得る處の目的關係に外ならないのである。自然は人間が依て以て己を究極目的に作り上げるが出來る處の手段を、人間に與へるより以上の事をなし得ない。つまり自然は人間が自から目的の概念を作り、而して合目的に構成されたる事物の集合から、彼の理性によりて目的の一システムを作る可能を與ふるに外ならぬ。

茲に吾人が特に注意するを要する點がある。夫れは右に述べしカントの思想は決して客觀的因果結合の破壞或は毀損を意味するものでないと云ふことである。余輩がカントの眞意として解する處によれば、自然の最後の目的と自然生產物の究極目的(Der Endzweck von den Naturprodukten)との區別は、客觀的に樹立されたるものと解す可きものでなく、隨ふて此の區別は只客觀的事物に就て行はるゝだけの因果結合と全く關係のないものにして、勿論之を破壞し或は毀損するものでないのである。而して超越的事物(トランスチェンデンターレス、オブエクテ)として考察されたる自然は、因果的法則或は自然的法則に從ふ可きものである。されば又何等かの客觀的結合の認識を得んと欲する人は、彼の興味を引く對象を自然物として考察すると云ふ立場に自から主觀的に置かねばならぬ。併し此の主觀的立場は吾人が現實に對してとり得る唯一の可能的のもので

ない。吾人は又客觀的結合の捕捉を狙らふことなしに、現實を考察することも出來るのである。而して此の際には現實は何等の變動をも受けず、其の客觀的結合は何等毀損さるゝことなしに存續する。只吾人の興味はかゝる結合を捕へることに附着せずして、寧ろ文化生活に對して有する意義に於て之を理解し、評價することに附着するのである。但し吾人の文化生活も亦一の事實である。客觀的には總ての他の事實の如く、疑ひもなく、自然法則に從ふて居る。而して吾人が只此の客觀的見地に於て之を考察する以上、一層詳しく云へば吾人が只現實の其の一片が支配されて居る客觀的結合に於てのみ之を反省する樣に、吾人の主觀的見地を選擇する以上、吾人が依て以て其等の事實結合を文化生産物として、或は文化生活として特質附け得る根據は、隱れたまゝに止まるのである、併し吾人が一定の事實結合を文化的生産物として如何に特質附け得るかを問題として其の根據を考察する時には、吾人は現實に對して他の主觀的立場。卽ち目的論的立場をとらねばならないのである。

却說カントの考ふる處によれば、吾人が人類と稱せらるゝ自然生産物が依て以て他の自然生産物より區別される其の素質或は稟性を、目的論的判斷の對象となし、而して人類と稱せらるゝ動物の種の其等の特性が、如何なる目的に使用され得るかを

考察するときは、自然は宛も人類に此の如き特性を賦與し、夫れを利用して人類が、自己の自由行動によりて自然其物から獨立せる目的關係の世界を建設せんことを望むものであるが如くに、換言すれば人類は自然の最後の目的であるが如くに考へることが出來る。併し吾人が人類の自然的稟性ではなく、或處又或時に於ける自由なる人間の目的設定の生産物、及び目的設定の行動其物を、吾人の目的論的判斷の對象となし、人間によりて作られたる其等の目的結合を考察し、而して一の teleologia rationis humanae. によりて、つまり夫れ自身に於て建設され、自然法則より獨立せる目的のシステムの理想的尺度に從ふて、之を測定するときは吾人は此の方針に向へる行動(即ち今日文化行動と稱せらるゝもの)に於て、地球或は吾人の世界の意味が存在することを覺るのである。而して吾人は人類が此の方針に於て、或は此の目的に向ふて奮勵努力する以上は、之を究極目的として考察するのである。

實際に於て一の完全なる目的システムの理想は、一の「究極」を表示するものである。即ち夫れ以上に高き尺度は考へ得られない。但し茲には形而上學的意義、即ち現實に對する此の理想の何等かの本體論的關係は問題とならない。自然の合法より獨立せる目的のシステムは全く判斷の原則である。而して此く如くに考ふれば、自然

の最後の目的と究極目的との二つの概念が相互に對して有する關係は一層明らかに決定されてくるのである。卽ち理想に對して何等の本體論的意義が與へられないとすれば、換言すれば一般に又如何程現實が理想に對應するかは全く不問に附せられるとすれば、吾人は人間が只其の自然の賦與を合理的自由に於て利用し、夫れによりて己れ自からを究極目的となすが故にのみ、又此くなす時に於てのみ、自然の最後の目的となるものなるを認識し、吾人が只人間を文化創造者として觀念する時にのみ、人間は自然の最後の目的であるが如くに考へ得るのである。併し此の如き見地を離れて考ふれば、自然生產物間に於てかゝる優位を人間に認む可き根據は全く存在しないのである。

却說カントは以上述べしが如き一般的なる文化哲學的考察より狹義の歷史哲學的考察に移つて居るが、さきに述べし如く彼の考ふる處によれば、自然の最後の目的は人間の自然的稟性の最大の發達、卽ち特有なる目的設定の能力の發達に於て成立するので、而して自然は人間の不平等なることを利用して此の目的を達するのである。自然は吾人が自然物として益々發達すると云ふ意味に於て吾人を進步す可く强制し、又活動す可く强制する。併し然る間は吾人は尙ほ自然が利用する手段たるに

止まる。而して自然に對しては存在の意味は只其の最後の目的の實現の進行する以上に於てのみ成立して居る。併し自然は自から獨立に其の最後の目的を遂行することは出來ない、自然の最後の目的は人間が自由に自己の運命を決定することによりて始めて實現されるのである。卽ち人間が己れを究極目的となす時に、始めて人間は自然の最後の目的である。此くて只自然が其の最後の目的の實現の爲めに働くと云ふだけでは、存在に意味を與ふるに充分でない。併し自然は自由なる人間より始めて意味と價値とを受けるのである。人間の文化的活動なくは、存在は最とも嚴密なる意義にては意味のなきものである。吾人が依て以て意味ある存在を考へ得る根據は、自然が人間に强制せる行動にあるのでなく、人間が自然の支配より己を解放する夫れ以上の行動にあるのである。カントは自然を善き敎育家に倣らへて觀念し、自分の弟子が自分の監督を離れて自由に活動する日を視するものの如くに見て居る。

此くて「判斷力批判」に於ては、人間の上にありて人間を支配すると云ふ樣な力は、全く意味を失ない、或は一の條件たるに過ぎざるものとなつて居る、歷史は自由の歷史にして、自由より出でざるものは、總て歷史に對して只間接的な意味しか有しない

もの、又只自由なる目的設定に關係する以上に於てのみ考慮される價値あるに過ぎざるものとなつて居る。 茲には Idee zu einer Allgemeinen Geschichte の主要思想は全然排棄されて居るとは云はれないが、併し重大なる變動を受けて居ることを見るのである。 かの名譽心、支配慾、貪慾等の情慾が、歴史的發達の過程に於て有する意味は重大なる變動を受けて居るので、Idee Zu einnr Allgemeinen Geschichte に於ては、此等の自然的稟性は、其の反對によりて人類の發達を誘致する處の、勝れて創造的なる力として取扱はれて居るが、「判斷力批判」に於ては其等の自然的稟性は最早文化の促進者として取扱はれず、却て文化發達の障害物と見做されて居るのである。

以上述べし處によりて、カントの歴史哲學的思想が「判斷力批判」に於て到達せる發達の最頂上を簡單に究明したと思ふが、尙ほカントの歴史哲學的思想の研究上、同書に於て特に注意す可き二つの問題がある。 一は同書に於ける彼の神學的思想にして、二は同書に於ける「かの如く」(als ob)の論法である。

茲に「判斷力批判」に於けるカントの神學的思想を詳しく論述する必要も亦餘白もないが、併し其の中には彼の歴史哲學的思想の研究上から見て看過す可からざるものが含まれて居る。 是れ彼は本書に於ては、彼が歴史哲學的考察より起せる問題の

直接的連續として神學的問題を論究して居るからである。而して彼の究極目的論は倫理神學に於て其の最後の結論に到着して居る。尙ほ彼は夫れに先だちて、自然の最後の目的の觀念を物理神學に於て論究して居る。而して彼は是れまで保持し來れる批判的立場より形而上學的立場に移つて居る。此くて是れまでは世界の意味を結局自由なる實在物が自然秩序から獨立に成就する處のものに於て求めて居つたが、今や更に此の自由の形而上學的根據を求めんとして居る。併し彼は其の形而上學的根據を論證して居るのでなく、之を信じて居るのである。玆に彼の論述して居る思想系列の終極を求むれば夫れは實際的信仰に歸着する。而してかゝる立場から彼の歷史哲學を顧ると、歷史哲學は結局 Idee zu ein Allgemeinen Geschichte に於て見るが如く再び一の信仰となつて居ることを覺るのである。卽ち歷史哲學は目的觀念に從ふて行動する世界支配者によりて成就される人類理想の進步的實現の信仰であるのである。カントが此の神的原理に認めたる役目はあまり明白でない。彼は之れに付て詳しくは論述して居らない。而も彼は一切の合目性の存在を其の效驗に還元して理解せんとしたことだけは明確である。而して自然の存在は、只人間が自由なる目的設定に於て活動すると云ふ條件の下に於てのみ目的である可き

ものとすれば、自由なる人間の活動、卽ち文化活動は攝理に於て其の最後の根據を有するものであると推論しなければならぬ。もつともカントは「判斷力批判」に於ては明白なる言葉で此の論結を引き出して居らない。而も論理的に推究し行けば吾人は此の論結に到達せねばならぬと思はれる。又只此の論結を引き出すに於てのみ、進步の信仰は形而上學的に樹立されて居ると云ひ得られると思ふ。

終りにカントの「かの如く」の論法、卽ち類推認識に付て少しく論じて置く。夫れ「判斷力批判」に於ける目的論の全體は「かの如く」說に基づいて立てられて居るので、而してカントの歷史哲學は「かの如く」說によりて始めて其の明確な組織的地位を決定されたと云はれて居る。此くてカントの成熟せる歷史哲學的思想の眞義を十分に理解するには「かの如く」說の本義を究明することが必要であるのである。然るにカントの「かの如く」思想は彼れ自身の論じて居るだけでは、其の本義のあまり明白なるものでない。且つ近頃ヴァイヒンガーやリッカートが特に之を論究するまでは、あまりカント研究者の注意を引いて居らなかつた。併し余はこゝに特に此の問題に付て詳しく論述する暇がないから、極簡單に「判斷力批判」に於けるカントの歷史哲學と「かの如く」思想との根本的關係を示すに止めて置く。今カントはさきに述べし如く、自然の

最後の目的及び究極目的の思想によりて、歴史哲學の根本的意義を決定せんとしたのであるが、彼の云ふ處によれば、人間が己れを究極目的とさなんとするならば、卽ち人間が自然より獨立して、夫れ自身にて充分であり得るが如き目的關係を、己れ自身並に彼が彼の行動によりて充實し得る範域に與ふ可く努力するならば、彼は自然の最後の目的である「かの如く」に考へられるのである。併し余輩の見る處によれば、かゝる關係に於ては「かの如く」は、全く言葉の形式に屬するものとなり、右の文章の意味は、つまり人間が己れを自然の目的として考へるならば、卽ち自然を彼の普遍妥當的目的設定の手段となすならば、彼は己を究極目的となすと云ふに過ぎないのである。フイヒテは此の思想に「吾人の世界は吾人の義務の感覺化されたる物質である」(Unsere Welt ist das versinnlichte Materialunserer Pflicht.)と云ふ有名なる形態を與へた。併しカントは茲に彼は其の假設的な倫理的に制約されたる形式によりて、「かの如く」を單に言葉の使ひ方或は單に一の文句となし、隨ふて實質的には無用の冗物として仕舞ふたことを意識して居つたであらうか。余輩はそうは思はない。と云ふのは彼が茲に「かの如く」思想に付て試みたる形而上學的應用は、まさしく「かの如く」によりて輸入されたる目的概念に本體論的意義を賦與することを主眼とするものであるからである。

八　「判斷力批判」後の著作に於ける歷史哲學的思想

今「判斷力批判」後の著作に就て、カントの歷史哲學的思想の發達を研究すると、吾人は彼の批判哲學の精神に適合する批判的歷史哲學思想は同書に於て其の發達の頂上に達し、其の後の著作に於ては夫れ以上の何等の發展をもなして居らないのみならず、却て以前の立場に逆戻して居ることを發見するのである。否な「判斷力批判」に於ても前節に於て指摘せし如く其の神學的思想を論述する部分に於ては、彼が歷史哲學の中心觀念と見る歷史の意味、卽ち進步の觀念は、既に再びもとの形而上學的信仰に逆戻りしつゝあることを見るのである。要するに「判斷力批判」後の著作に於けるカントの歷史哲學思想は批判主義の精神を益々發揮するのでなくして、却て形而上學的考察へ逆轉して居るのである。

更に、吾人の注意す可きは進步の形而上學的信仰其物も段々弱はりてもとの力を失なひつゝあることである。卽ち進步に對する疑ひの念が段々カントの頭に起り來りて、進步信仰の力が弱はり行く傾向の見ゆる事である。されば彼の著作全體を通觀すると、彼は眞に進步を信じて居つたかどうかは疑はしくなつてくる。此くて

ロホルやルヌヴイエーの如くカントは人類の進歩を確信して居つたと見る人々に對して又フーゴー、ヂンガーの如くカントは人類の進歩を否定したと考へる人々もあるのである。要するにカントは始めは人類の進歩を確信して居つたのであるが、然るに後には段々之を疑ひ始めたのであると見るは、最とも穩當なる見解であらうと思ふ。而して彼が人類の進歩を疑ふ傾向は、判斷力批判後の著作に於て段々著しくなつて居ると思はれる。されば特に此の著作の表はるゝ以前の著作に付て考究すれば、彼は人類の進歩を確信して居つたと云ふことは出來るが、併し特に此の著作後の著作に付て考察するときは、彼は人類の進歩を否定したと云ひ得られないこともない、少くも彼は之を疑ふて居つたと云ふことが出來る。然らば何故に彼は晩年に至りて人類の運命に對して悲觀的態度をとり、人類の進歩に對して懷疑的態度をとるに至つたか。其の重要なる原因は、恐くは、佛國の革命に付て當時獨逸の多數の進歩的思想家の抱て居つた大なる期待が、其の革命の進むにつれて段々に裏切られ、彼等が人類の運命に付て一般に失望落膽して來たことや、當時の普魯西國王の反動的政策によりて彼等が大なる壓迫を受け、カント自身も亦其の迫害を免れ得なかつたこと等であらうと思ふ、殊にカントが段々年老いて元氣の衰へつゝありし際に

右の如き事情が起つたのであるから、彼は自から人類の進歩を疑はざるを得なかつたのではあるまいか。余は是れより「判斷力批判」後の著作に付て、カントの形而上學的逆轉並に懷疑的態度が如何に進行せしかを簡單に論述して見やうと思ふ。

今上に述べしカントの懷疑的態度は、「判斷力批判」の翌年卽ち千八百九十一年に公にされた Über das Misslingen Aller philosophischen Versuche in der Theodicee に於て既に明らかに認められるのである。本書は歷史哲學上格別興味あるものではないが、併し右の態度の發達に付て注意す可き或物を含んで居る。夫れは世界の本體論的根柢、世界創造者と目的の世界に於ける主上とが同一視され得ると云ふ見解を大に排斥して居ることである。而して「判斷力批判」に於ける上に述べし形而上學的轉回は、本體論的最高原理と目的論的最高原理との形而上學的一致を前提として出發せるものなるを應ふときは、右の見解の排斥は如何なる意義を有するかは容易に推察し得られるのである。

次に Der Streit der Fakultäten の第二部 Der Streit der Philosophischen Fakultät mit der juristischen はカントの歷史哲學思想を研究するに當て特に注意す可きものの一である。但し茲に本論文を論究するに就ては、少しく述べて置かねばならぬことがある。

夫れは本論文の起草の年代に就てゞある。本論文は千七百九十八年に公にされたものであるから、其の公にされた年代から見ればカントの最とも晩年作の一である。併しカントが此の論文に付て或人に送つた書面や又本論文の思想の性質などから考へて見ると千七百九十年代の始めに既に起草されて居つたものと推察されるのである。恐くは Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft 以前に起草されたものと思はれる。是れ茲に此の著作の前に本論文を考究せんとする所以である。

今歴史哲學上より見て本論文に於て先づ注目す可きは、カントの歴史哲學に於て甚だ重要なる地位を占むる攝理と人間の自由との反對が、人間の自由は本來不合理性のものと見る觀念によりて特異なる形態をとつて居ることである。夫れ本論文に於てはカントは人間の自由より出發して居るか、然るに茲に彼が人間の自由を重要視して居るのはつまり歴史の不合理的方面を大に高調せんが爲のである。併し夫れが爲めに歴史は全く無意味のものとなつて仕舞ふ危險が起つて來た。而して此の際歴史の意味を救ふ唯一の可能は再び Idee zu einer allgemeinen Geschichte の根本思想に立ち歸ることである。卽ち攝理の觀念を大に高調して、人間を只創造者の手に使はるゝ道具に過ぎないものと見ることである。併し攝理は到底論證し得可から

ざるものであるから、結局吾人は之を信ぜねばならぬことになる。是れカントが是れまでに此の問題を論究する場合に常に到達した最後の論結であつた。然るに本論文に於ては彼は夫れ以上に進まんと試みて居る。即ち攝理を信ず可き理由を述ぶる上に更に之を論證せんと試みて居る。然らば彼は如何に攝理を論證せんと企だてたか。

今カントが其の論證の目的物としたのは人類の進歩的倫理化ではなくして、只其の進歩的合法性 Legalität である。倫理的基礎の增大は人間の認識し得ない或物である。只「人類の道德的性質の現象」(Die Phänomene der sittlichen Beschaffenheit des Menschengeschlechtes) のみか論辯の對象となるのである。さればカントは經驗に基づいて右の論證を試みたのである。殊に佛國革命の參觀者が感識するが如き「一般的及び非利己的なる參加」(allgemeine und uneigennützige Teilnehmung) の經驗的事實を支柱となさんとしたのである。此の「熱誠(エンツシアスムス)に近き參加」は總ての眞實なる熱誠の如く、只理想的な實に純道德的な或物に向ふてのみ行はれ得るのである。併し此の道德的なる或物はあるがまゝの變動の大さに於て成立するのでなく、佛國に於て自然法的憲法が生れて來たと云ふ事實に於て成立するのである。要するに人類が歡喜し歡迎する

のは革命でなくして進化である。佛國の革命より生れたる憲法は共和的憲法にして、其の本質上好戰的であり得ないもの、吾人をしてより善きものへの持續的進歩を望ましむる處のものである。一たび佛國革命の起りたる後は此の愈々より善き人類の事業への進歩は止む可からざるものである。是れ全文化人類が佛國革命の道德的に參加する參觀者として感識せる處のものである。要するに人類の歷史を總觀すると、吾人は人類は常によりよき善きものへ進歩しつゝあつたと云ふこと、又同一の方針にて進歩し續けるであらうと云ふことは、啻に實際的主旨に於て望ましきばかりでなく、理想的にも保持し得らるゝ思想である。

併し此の如くにして論證し得られたるは、只究極目的に到達する爲めの消極的條件の實現に就てだけである。卽ち戰爭が段々に制限せらるゝことや、眞正なる法理に基づいて立てられたる憲法の設定されることなどに關してゞある。夫れ以上のもの、卽ち人類進歩の道德的方面は吾人は之を「上より」望まねばならぬ。而して茲に「攝理」に對する「希望」が起つてくる。此くてカントは自由なる文化活動と神の支配との調和を、兩範圍の間に甚だ簡單に設定せる境界線によりて成就せんとしたのである。卽ち合法性(レガリテート)への發達は人間の仕事にして、道德性(モラリテート)への發達は攝理の仕事であると見

て、甚だ簡單に兩者の調和を試みたのである。

以上述べし見解に於ては、歴史の意味は先づ第一に攝理に對する意味である。人間が依て以て自から合法性の發達を成就し得る其の道德的稟性は攝理の與へたるものであり而して又人類の仕事の最頂上をなす道德性(モラリテート)の發達は攝理より望まる可きものである。此くて此の論文に於ても最後の言葉は矢張り信仰であるのである。

次にカントが千七百九十三年に公にせる Religion innerhalb der Grenzend er blossen Vernunft は、歴史哲學の上から見ると、甚だ奇妙なる地位を占めて居る。本書は一方に於てカントの非歴史的思惟法を著しく表示すると同時に、他方に於ては歴史哲學に對して注意す可き思想殊に攝理と人間の自由との反對の調和に付て注意す可き思想を說述して居る。尙ほ本書に於てはカントは歴史に於て進步があるか又は退步があるかと云ふ問題を呈示して、直接に歴史哲學の根本問題にも論し及ぼして居る。而して此の問題の論究に於て、彼が進步說の辯護者に對して加へて居る批評は彼の懷疑的悲觀の態度を明らかに示して居るのである。併し本書に於て彼が此の問題に付て論述して居ることは、あまりに第十八世紀流の非歴史的なもので、歴史の進步或は退步を、全く歴史其の物を顧慮せずして論議して居るから、余輩は之れに付て、あ

まり興味を感じない。それで茲には只彼が本書に於て攝理と人間の自由との反對を調和せんが爲めに論述して居る思想の歴史哲學的意義を少しく論究するに止めて置く。

夫れカントは本書に於ては、人類が夫れ自身の力だけでは、恐くは到底達し得られないと思はるゝ其の合理的運命に到達するを助ける爲めに、攝理を假定して居るのである。殊に人間が相團結して社會的行動を爲すには、神の協働が必要であると考へて居るのである。而して又彼は此の團結は人類が倫理的最高善に達するには必要缺く可からざるものと考へた。併し攝理思想によりて人間の自由が壓倒されることを避けるために、茲にカントは攝理思想に特異なる解釋を下して居る。要するに彼の考ふるに處によれば攝理の作用は現實に存在し、自由に選擇されたる人間の目的を支持することに限られて居るので、攝理は人間の努力に反對して自己特有の高等なる意向を强制せんとするものでないのである。此くで攝理は人間の自由に對して何等の危險をも意味しないものと解されて居る。併し攝理の作用は只或は主として人間を其の衝動に從ふて營まるゝ活動に於て支持するものであるとすれば、人間の衝動中には愚鈍な或は惡いものが少なくないから、結局人類の進歩は疑は

しいことになる。而して此く見ることは、始めに彼が進歩説の辯護者に加へた批評の主意とも合致して居るのであるが、而もカントは本書中多くの場合に於て愉快なる樂觀的思想を述べて居る。此くて一見すればカントは大なる矛盾に陷つて居るが如くに思はれる。併し玆に彼が攝理の指導、及び人類が其の理想的目的に絶へず近づくと云ふことに付て述べて居る總ての樂觀的な意見は、つまり只人間の切實なる希望や願望を大に强める爲めの象徵的觀念に外ならぬものにして、其等の觀念は只實際的主旨に於てのみ妥當するものなるを思ふときは、彼は敢て矛盾に陷つて居らないことを覺るのである。而も此の事は彼が人類の進歩に對して益々懷疑的態度をとつて來たことを明らかに表示するものである。

次にカントが Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunftを公にしてから數ヶ月後に公にせる Über den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis に於ても、歷史哲學上から見れば本質的に同樣なる思想を述べて居る。但しカントは本論文中に永久平和問題を稍々詳しく論じて居る。而して道德的進歩及び永久平和を進歩の眞實なる目的として辯護する爲めに、之れに理論的考察を加へて居るが、「而も「之れは只意見及び單なる假說に過ぎない」と云ふて居る。

カントが右の Über den Gemeinspruch を公にせる後間もなく執筆したと思はるゝ Die Fortschritte der Metaphysik に於ては、歴史哲學上の問題は別に論究されて居らないが、併し其の中には歴史哲學上より見て注意す可きものが含まれて居る。夫れは人類の進歩は一の實際的獨斷的理想であると言明されて居ることである。而して彼は「世界の進行が人類の進歩に對して與ふる反抗に拘らず、かゝる假說に從ふて行動するは義務である」と云ふて居る。

次に千七百九十四年にカントの執筆せる Das Ende aller Dinge は、一種の戯作とも見る可きものであつて、時勢に對する彼の不平を哲學的論辯の形にて述べたるものである。歴史哲學上より見て別に注意す可き新しき何物もないが、併し演劇の意味は其の終りに於て表はれる如く、世界史にありても世界の終りが世界の意味を表示するものであると云ふ見解は、多少の興味を惹起するものである。

さきに Der Streit der Fakultäten に於ける歴史哲學思想を論究せる際に、同書に於てカントは既に Idee zu einer Allgemeinen Geschichte の思想へ逆戻りする傾向を表はして居ること、及び其の傾向は Über den Gemeinspruch に於ても亦表はれて居ることを指摘したが、今同一の傾向は、千七百九十五年に公にされた Zum ewigen Frieden, ein philosophis-

cher Entwurf に於て更に一層明白に表はれて居る、今日は世界平和問題、國際聯盟問題が盛んに論議されて居る際であるから、余は本書の思想に付て茲に稍々詳しく論述したいと思ふが、併し其の暇はないから、只其の根本思想に付て少しく論述するに止めて置く。

夫れカントは本書に於て永久なる平和は、歴史が眞實に到達せんと努力する狀態であることを主張せんとせしものであるか、又は實際的見地より考へて永久なる平和は義務の要求する狀態であるとして、之を表現せんとせしものであるかは問題である。前者の見解は多くの人々がカントの眞意であると認むるものであるが、併し、後者の見解も亦彼の眞意であると認むることは出來るし、現にヤコブの如きは此の見解がカントの眞意であると論じて居る。而して詳しく吟味して見ると、本書に於ては右の二種の見解或は傾向は共に在在することが發見されるが、而も、其の主要なる見地は實際的のもの、卽ち永久的平和は義務であると見る見解であると思ふ。但し理論的關係に於ては永久平和の觀念は確かに放縱な觀念であると云はねばならぬ。是れ歴史の現實なる進行に付ては、永久平和客觀的實在性を證明することは不可能であるからである。併し永久平和は理論的には全然不可能であると云ふことも

出來ない。歴史の進行は何時か永久平和が眞に實現されることを指示するものと考へることは出來る。而もカントは本書に於ては歴史を理解せんとするのでなくして、歴史を構想せんと企だてゝ居るのである。即ち將來を豫定せんと試みて居るのである。夫より彼は攝理の觀念を大に重要視し、而して千七百八十四五年頃の彼の歴史哲學に於て見る處の形而上學的自然概念が茲に復活して來て居ることを見るのである。併し如何にしてカントの批判前時代の思想が此の時代に於て此の如く復活して來たか。吾人はカントの批判的精神が老年に至つて大に衰へて來たと云ふより外に、之を説明する理由を發見することが出來ない。

尙ほカントは本書に於て啻に彼の歴史哲學の始めに逆戻りせるばかりでなく、批判前時代に於て右の思想の根柢となれる思想も亦復活して來て居ることを見るのである。彼が其の時代に攝理に付て説述して居つたことを本書に於て矢張り攝理に付て説述して居ることと比較すると、吾人は兩者の形而上學的考察が著しく相類似して居ることを見るのである。

終りにカントが千七百九十七年に公にせる Metaphysik der Sitten (1. Metaphysische

Anfangsgründe der Rechtlehre; 2. Metaphysische Anfangsgründe der Tugendlehre) に於ける歴史哲學思想に付て少しく考察して置きたいと思ふが、此の著作に於てはカントは嚴密なる意味にて云ふ歴史哲學問題に觸れて居らない。而して彼の歴史哲學の根柢をなすと認められる一般的思想に關しては Zum ewigen Frieden に於て彼の論述して居る事と大差はない。併し此の著作はカントの最後の主要なる著作として、彼は歴史哲學上結局如何なる立場で終つたかを考究するには、甚だ興味あるものと思ふ。夫れで茲に二三の問題に付て彼の歴史哲學思想の發達の終極を示すこととする。

今本書に於てもカントは其前年に公にせる Zum ewigen Frieden の問題を論述して居る。而して永久平和の觀念は本書に於ては實際的理想以上のものとして論述せられ、其の點に於て彼は前著作に於てよりは一歩進んで居る。併し其の實際の實現に關する豫言が全く排棄されて居るのを見て、吾人は如何に懷疑主義が再び彼の精神に於て強まつて來たかを推察することが出來ると思ふ。併し本書に於て殊に吾人の興味を引くは世界市民權に關する彼の見解、幷に之れに連關して彼の論述して居る植民政策論である。

カントは「新發見の土地に於て、一の人民が其の土地に既に定住せる人民の合意を

得ずして其の近傍に於て住居を定め財産を占有し得るかと云ふ問題を呈出し、而して人間の尊嚴及び人間の權利の概念を基礎として之れに先驗的答解を與へて居る。彼の考ふる處によれば、歐洲人民と同じくホッテントート人やツングース人も人間の尊嚴及び人間の權利を承認せらる可きものである。されば何れの人民も他國を侵略し、其の國の土着民の意志に反して强制的に其地に定住す可きものでない。歐洲人民が野蠻人の土地に定住せんとするに當ても、宜しく彼等と契約を結び、其の契約に從ふて定住す可きものである。尙ほ此の契約を結ぶに當ては決して野蠻人民の無智に乘じて彼等の利益や權利を侵害してはならぬ。

今カントの右の見解は單純なる人道主義の見地から考ふれば甚だ高尙なる思想であると云はねばならぬ。併し堅實なる實際的見地から見るも、亦彼が「判斷力批判」に於て展開せる人間の權利の思想から考ふるも、決して穩當なる思想であるとは云はれない。未だ近代的權利概念の發達して居らぬ野蠻人に對して、如何にしてカントの解するが如き契約が締結し得られやうか。又「判斷力批判」に於て彼の論ずる處によれば眞に人間としての權利、卽ち人間が自然の目的として見られる可き權利は、只人間が自然から獨立せる自由なる目的設定に於て努力する限りに於てのみ承認せ

らる可きものである。而して、自律は Animal Rationale の一屬性であるが、併し單に Animal Rationabile としての箇人の屬性ではない。箇人にありては自律は其儘にて一の屬性ではなくして努めて後に得られる可き性質である。されば自由なる目的設定の可能 (Animale Rationabile) が、現實 (Animal Rationale) となる可く努力しない處には、人間の自律も尊嚴も權利も其の儘にては承認され難き理である。而してカントが若し此の思想を保持して世界的市民權問題や植民政策問題を考察したならば、彼が本書に於て實際に論述して居るのとは異なれる見解に到達したであらうと思はれる。

尙ほカントが自然人民の無爲生活を攪き亂す文化人民の權利を承認しなかつたことに就ては深い理由があると思ふ。夫れは彼の目的世界論の根本思想に基因するものである。今カントは人間の目的として結局は只二種の目的を認めただけである。夫れは自己完成と他人の幸福とである。而して此等の二者は又同時に人間の義務であると考へたのである。此の思想は殊に Metaphysische Anfangsgründe der Tugendlehre に於て詳しく論述されて居るが、同書に於て彼は他人の完成を促がし或は助ける義務と云ふは、矛盾せる觀念であるとして排斥して居る。而して他人に關する目的或は義務としては、只其の幸福を圖るだけに限つて居る。此くて彼は根本的

には極端なる箇人主義を懷抱して居つたことが覺られるのである。而して斯る見地を徹底させて行けば結局文化生活を否定することにもなるのである。要するに箇人は只自己の完成を目的とし、或は義務として、之が實現に努力す可きものにして、他人の完成の爲めに努力し得ないもの、隨ふて努力す可きものでないと考へるならば、卽ち他人の上に道德的影響を及ぼし得ないもの、隨ふて其の影響を及ぼさんとす可きものでないとすれば、人類の道德的進步と云ふことは到底正當には信じ得られないことになるのである。是れカントの歷史哲學文化哲學の根柢に潛在する一大缺點にして、彼が健全なる文化哲學を建設し得なかつた根本的原因は其處にあると思はれる。

却說是れまで余がカントの歷史哲學の概念、方法及び其の內容の發達に就て論述し來れる事は主としてメーヂクース氏の研究に基づいて立言せるものにして、其處此處に挿入せる批評的リマークスを除けば大體上同氏の研究を紹介せしものと見てもよいのである。但し若し誤謬があるとすれば、余は其の責を負ふので敢てメーヂクース氏に之を課せんとするのではない。とにかく是れまで述べ來りし處によりて、余はカントの歷史哲學の眞義を大體上究明したと思ふから、是れより聊々其の現代的價値を評定して見たいと思ふ。（未完）